

目次

1. はじめに	篠原 睦	2
2. 今年度の活動概要	篠原 睦	3
3. 夜回りの定例化	山本 侑	5
4. 郊外の野宿者増加と新札幌における支援	中村 ちひろ	7
5. 生活健康相談会	世良 迪夫	10
6. 他団体・機関との連携	山本 侑	14
7. 野宿生活から抜け出すためのお手伝い	南部 葵	17
8. 会計報告	世良 迪夫	23
9. 来年度にむけて	篠原 睦	24
10. 私と労福会		26

1. はじめに

北海道の労働と福祉を考える会は発足以来 6 年半の間、本当に沢山の方々に支えられながら、地道に活動を続けてまいりました。どこかのタイミングで急成長したとは決して言えないかもしれませんが、それでも活動の灯を消すことなくじっくりと成長し、かつ柔軟に変化してきたようにも思います。周囲の反応も徐々に変わってきました。最近マスコミは野宿者問題を多く取り上げ、関連ニュースを目にする機会が増えました。また、多くの方から「何か自分に出来ることはないか？」というような連絡を事務局まで頂けるのも、市民の皆さんの関心が高まっていることの表れでしょう。同時に、当会が周囲から期待される役割は年々大きくなっていき、日常的に忙しく活動するようになりました。

しかし、そのような状況にあっても忘れてはならない大切なことが幾つかあります。第 1 に、まだまだ野宿者に対する世間や行政からの偏見は根強く、多くの人たちは野宿者問題に無関心であり、野宿者の厳しい状況を知る人は少ないということです。私たちは、支援上での生の体験や野宿者の悲惨な現状を、もっと社会に対してアピールしていかねばならない立場にあります。第 2 に、常に野宿者のニーズに合わせて労福会の活動を再考して、より良いものにしていかなければならないということです。私たちは、野宿者の「自立」を支援する団体です。しかし、自立とは何か、より良い活動とは何か…このような問題は、きっと頭でばかり考えていてはその本質や答えに近づく事はできないでしょう。

昨年度の反省として、野宿者とじっくり向き合い継続的にサポートするという基本に、もう一度立ち返る必要があるのではないか、という意見が挙げられました。このようなことから、当会は「野宿者に寄り添い繰り返し関わることで、彼らの目線に立った自立支援を考える」という目標を持って今年度の活動をスタートさせました。

2. 今年度の活動概要

当事者の味方に立ちたい、頼られる労福会でありたい、という姿勢を再確認して取り組んだ今年度の活動には、幾つかの重要な変化や動きがありました。一年間を振り返りますと、特に目立った点としては以下の 5 点があげられます。主な活動は、**図表 2-1** の通りです。

第 1 に、夜回り活動の定例化を行ったことです。今まで不定期に行っていた夜回りを隔週、決まった曜日・決まった時刻に行うことで、野宿者と実際に顔を合わせる機会を増やして信頼関係作りに力を入れて参りました。

第 2 に、新札幌など札幌郊外で生活する野宿者に対する支援を開始したことです。これは札幌の中心部（札幌駅・大通近辺）から野宿者が減少したことに関連しています。

第 3 に、炊き出し・生活健康相談会を 6 回、法律相談会を 1 回行ったということです。しかしこれらの相談会に来場する方は昨年までと比べて減少しており、今一度企画の内容や目的そのものを再考していく必要があると言えます。

第 4 に、他団体・機関との関わりがさらに強まったことです。それぞれの団体が役割を分担する中で、労福会の独自性や存在意義が今後益々問われていくことでしょう。

第 5 に、生活保護申請等の付き添いと、その後居宅に移られた元野宿者に対する支援の動きです。労福会の更なるステップをどのように踏み出すか、調査や議論を重ね、具体的に動き出しました。

詳しくは、この後の各報告で明らかにしていこうと思います。

図表 2-1:2005 年度 活動カレンダー

3 月 4 日	札幌市との意見交換会	(1/4)
5 月 9 日	札幌市との意見交換会	(2/4)
5 月 21 日	炊き出し・生活健康相談会①	(札幌市と共催)
6 月 13 日	北海道医療大にて講演	(佐々木・南部・篠原)
6 月 25 日	炊き出し・生活健康相談会②	(札幌市と共催)
7 月 1 日	よせば交流会参加	(全国の支援団体の交流会)
8 月 2 日	北海道庁との意見交換会	(1/2)
8 月 20 日	炊き出し・生活総合相談会③	
9 月 15 日	札幌市との意見交換会	(3/4)
9 月 16 日	北海道庁との意見交換会	(2/2)
10 月 1 日	炊き出し・生活健康相談会④	(札幌市と共催)
10 月 7 日	拡大夜回り	(南北線、新札幌、桑園なども)
10 月 18 日	司法書士会による学習会「借金問題解決法」	
10 月 22 日	人数確認調査	
11 月 5 日	炊き出し・生活健康相談会⑤	(札幌市と共催)
11 月 26 日	早朝回り	(新札幌へも出向く)
12 月 4 日	炊き出し・法律相談会⑥	(司法書士会と共催)
12 月 8 日	ボランティア講習会で講演	(木下・南部・篠原)
12 月 19 日	居宅生活者への年賀状書き作業 & 送付	
12 月 24 日	クリスマス早朝回り	(新札幌へも出向く)
1 月 25・27 日	労福学習会「生活保護申請の必勝法」	
2 月 4 日	炊き出し & 総合相談会⑦	
2 月 12 日	NPO 法人もやい事務局長・湯浅誠さん学習会	
2 月 13 日	札幌市との意見交換会	(4/4)
3 月 4 日	2005 年度総会	

3. 夜回りの定例化

昨年度までと比較して、今年度の活動の最も大きな変化として挙げられるのは夜回りの定例化を行ったことです。

夜回りとは、札幌駅・大通駅など野宿者の多い地域を中心にスタッフがまわり、缶コーヒーやおにぎり等を配って野宿者とお話をするということです。これは日常的に野宿者と関わりをもち続け、また健康面などで緊急な処置が必要な方の対応をするという目的で、会の発足当時から続けている活動です。

昨年度までこの夜回りは不定期的に行われており、実施回数も年に10回程度でした。そのため、会内でも“もっと夜回りを積極的に行ってみてはどうか”という意見が近年聞かれ始めていました。また昨年度の2月に、夜回りを定期的に行っている「NPO 仙台夜回りグループ」さんの視察を行った際にも、やはり“定期的な夜回り”が支援者と野宿者の繋がりをより強いものとする、ということ再認識させられました。

これをうけ、前述したように今年度は夜回りの定例化を行いました。具体的には、毎月第1、第3、第5金曜日の20時から夜回りを定期的実施し、また各スタッフには出来る限り、毎回同じ地域を見回ってもらうようにしてきました。このことで、同じスタッフが同じ野宿者と関わりを持ち続けることが可能となります。さらに野宿者の中には、夜回りの日には決まった場所でスタッフを待っていて下さる方も多く、これまで以上に多くの方と接することが出来るようになりました。今年度はやはり夜回りの回数を重ねるにつれ、スタッフ内から“これまで全然相手にしてくれなかったおじさんがだんだん話してくれるようになった”“いつも声を掛けてくれてありがとうと言われた”という声が多く聞かれるようになりました。このように、会と野宿者との信頼関係が強まったことを実感する機会が多くなったことは、我々スタッフにとっても嬉しいことでした。また、今年度は毎回の夜回りの後にはスタッフが集まり反省会を行ってきました。このことで、各地域での野宿者の近況やその人数、夜回りの時間帯に野宿者がいる場所について会として把握することが出来るようになってきました。

その他にも夜回りを定例化することで以下のようなメリットがありました。

まず、これまで不定期だった活動日・時間、集合場所の固定化により、夜回りへの一般の参加者が増えたことです。このことは、普段野宿者と接する機会が無い多くの人々に、その厳しい生活状況を知り、野宿者問題に興味を持ってもらうことを可能にします。実際、初めて参加された方の中からは“野宿の方々への偏見や思い込みが無くなった”等というような意見が多く聞かれました。

また、生活保護申請の際に救護施設の空きを待たなければいけない、というケースが減少しました。これまでは、同伴の約束は主に炊き出しの場で行ってきました。結果、生活保護申請が炊き出し直後に集中してしまい、救護/就労施設の空きを待つために野宿者が路上で何日も待たされるということがよく起こっていました。今年度は、定期的に行う夜回

りの中で同伴の約束に結びつくケースが幾つもあり、前述した申請の集中を避けられるようになりました。

これまで書いてきたように、今年度は定例化することで夜回りをより効果的な支援とすることに成功したと言えるでしょう。また回数の上でも、昨年度の倍以上の計 25 回の夜回りを今年度は実施しました。定例化により、夜回りが事実上の会の活動の中核を担うようになったと言っても過言ではありません。配布物の中身や見回る地域等、野宿者のニーズに合わせて形態は変化させていかなければいけません。来年度も定例化した夜回りを会の中心的な活動の一つとしていく予定です。

<夜回りの様子>



4. 郊外の野宿者増加と新札幌における支援

・「ホームレス人数確認調査」

今年度も前年度と同様に札幌市の委託を受けて、平成 17 年 10 月 22 日に札幌市内のホームレスの人数確認調査を行いました。調査結果は、**図表 4-1、4-2** の通りです。この調査は、札幌市のどのような場所にどれくらいの人が生活しているのかを把握するために行っています。

・調査方法

昨年の調査結果と今年度の活動による情報をふまえて、調査範囲を札幌駅周辺、大通公園付近、豊平川河川敷、市内主要公園、地下鉄東西線、地下鉄南北線駅などに限定して調べました。具体的には、9ヶ所を計 13 組に分かれて調査しました。調査開始時間は、地下鉄沿線上は始発の動く 6 時頃、それ以外は野宿者がまだ寝ており移動を始める前の早朝 4 時頃としました。調査は、スタッフが 2 人 1 組になり担当場所をまわり、基本的に目視で性別・年齢等も確認していきました。

・課題

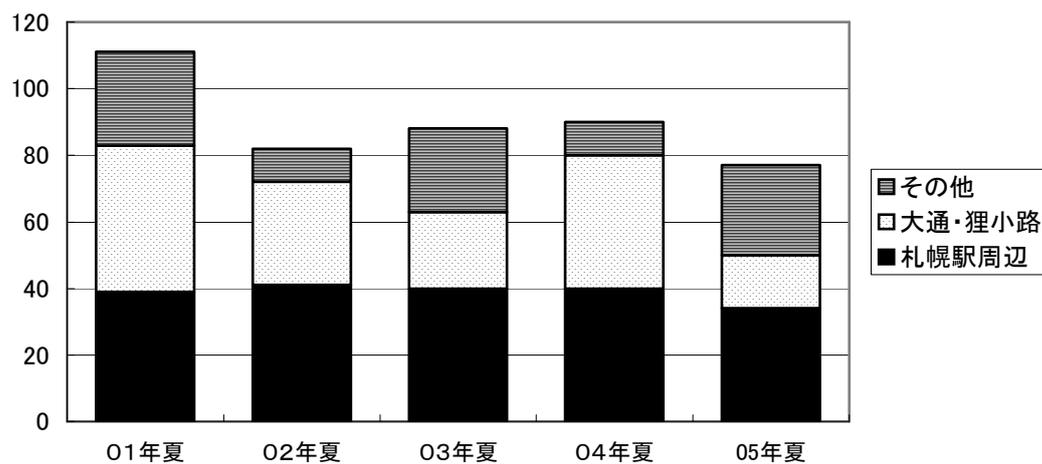
調査には課題も残りました。昨年同様目視調査という方法の限界です。札幌の野宿者の中には、一ヶ所にとどまらず夜中起きて歩き回ったりコンビニで過ごしたりする人がいたり、すすきのなどにあるビルの中にいる人もいます。また見かけから野宿者であると判断できない場合もありますし、時々サウナに泊まるような人もいます。目視調査では、このような人を見過ごしてしまっている可能性もありますので、実際には調査結果よりも多くの野宿者がいることは間違いないと考えています。加えて今年度は調査当日、強い雨に見舞われてしまいました。去年までの結果と比べ、全体的に人数が減っていること、特に大通公園の人数が激減したことなどは、この悪天候の影響もあると考えられます。

今年度は、事前に「野宿者がどこにいるか」という情報を集めて調査場所を決めていきましたが、今後はより事前の情報集めに力を入れ、調査方法も見直して、より正確な調査結果を得られるようにしていきたいと思えます。

図表 4-1: 人数確認調査の結果

＜調査場所＞	＜人数＞ ()内は 04 年夏
札幌駅・駅前バスターミナル	34(40)
大通・狸小路	16(40)
主要公園・すすきの	7(7)
地下鉄バスターミナル・JR	15(0)
豊平川河川敷	5(3)
合計	77(90)

図表 4-2: 人数確認調査結果の推移



・調査結果から

今年、札幌市民会館で行ってきた炊き出しの来場者の減少が目立ちました。その原因のひとつとして、札幌中心部からの野宿者の減少が挙げられます。人数調査の結果からも、札幌中心部、特に大通りにいる野宿者の減少が確認されました。その理由としては次のようなことが考えられます。①札幌市が、中心部の環境や景観を整えるためさまざまな対策をとり、そのため野宿者が居づらくなった¹⁾。②同伴によって生活保護を受給し郊外に住むようになった当事者が、生活保護を廃止された場合、札幌中心部まで戻ってこず、家があった場所の付近に留まるようになった。

・新札幌の野宿者に対する支援

また、人数調査から札幌中心部からの野宿者の減少が挙げられる一方で、新札幌など東西線沿線上の郊外にいる野宿者の存在も確認されました。これは、上記の理由等によって札幌中心部に居づらくなった野宿者たちが、居やすい環境を求めて郊外へと分散していったのではないかと考えられます。このことをふまえて、人数調査後に行った夜回り及び二度の朝回りでは、東西線沿線上の中でも一番人数が多くて駅も大きい新札幌まで足をのばしました。夜回りでは、新札幌の駅ビルが閉まる時間と重なってしまい、野宿者たちも移動していったのか会うことができませんでした。朝回りでは、新札幌の駅の入り口が開く時間に行ったところ、4、5人の野宿者に会うことができ話も少しできました。まだ札幌中心部のように関係ができていたとは言いがたいので、これからも新札幌をはじめとした郊外にもできるだけ多く出向いて積極的に関係作りをしていくことが今後の課題として挙げられます。

¹⁾ 札幌駅付近の自転車置き場の有料化により、荷物などを自転車に積んで駅付近に置いておくことができなくなったこと、野宿者が横になれるような長い椅子が撤去されたこと、分煙の徹底で駅周辺では喫煙がほとんどできなくなったこと等を指す

5. 生活健康相談会

当会では年に数回、「炊き出し・生活健康相談会」を行っています。今年度は計6回の「炊き出し・生活健康相談会」が行われ、また「炊き出し・法律相談会」も1回行われました。以下でこれら相談会について総括していきます。

・生活健康相談会とは

生活健康相談会は野宿者に限らず、生活に困っている人々のための場です。少しの間だけでも「暖かくくつろげる場」を提供し、「当会のスタッフとのコミュニケーション」をとり、「自立の可能性を探る手伝い」などを行っています。また、「市民に活動や野宿者の存在をアピール」する機会にもなります。今後、このような支援を重ね、当事者と接して行く中で、実際にどのような支援をするべきなのか、何が当事者にとってよいことなのか、さらに突き詰めて考えたいと考えています。

・来場者とその推移

相談会の来場者は昨年度と同様に、古くから野宿をしている人や、一度路上生活を脱した後、再び野宿者となった方が多く見受けられるようです。また、今年度は年齢の若い、20～30代程度の来場者も割合が多くなってきているように思われます。今年度の来場者数は、表5-1のとおりで、約50～70前後の人が相談会を利用されました。過去数年の来場者数と比べると、今年度は減少傾向にあります。他団体の炊き出しでも同様の傾向が見られるようで、これは主に札幌中心部から野宿者が減っているためだと考えられています（炊き出しは大抵、札幌中心部で行われています）。

・相談会の内容

①食事・物資の配布

今年度も、おにぎり・豚汁などの食事や、タオル・歯ブラシ・使い捨てカイロ・缶詰・カップ麺・石鹸・靴下・風呂券（銭湯を利用できる回数券）・衣類などを来場者に配りました。来年度以降もニーズや季節に合わせて、食事や物資を配布していく予定です。昨年度から大きく変わった点としては、おにぎり・豚汁などの食事を当会のスタッフが用意する体制ができたことです。今までは弁当屋の山の手屋さんなどに注文して作っていただいて、今年度も何度か協力していただいたのですが、6月、8月、2月の炊き出しでは教会などの場所をお借りして自炊を行いました。これにより、費用が食材分しかかからないため、炊き出しにかかるコストを削減することができました。自炊により、用意できる食事の自由度も高まったので、今後はおにぎり・豚汁などの定番メニューだけではなく、工夫した食事作りをしていきたいと思っています。

②生活相談

相談会の会場では、コミュニケーションも兼ねて当会のスタッフが当事者に対して最近の調子を聞いてみたり、世間話を持ちかけたりして、気軽に話ができる雰囲気をつくれるよう心がけています。最初はちょっとした雑談から始まり、そこから当事者の抱えているさまざまな問題が出てきたり、その解決法を一緒に模索したりできます。時には、はじめはあまり乗り気でなかった生活保護の申請も、話をするうちに頑張ってみようになる、ということもあります。法律的なことや、健康に関することなど一般のスタッフが太刀打ちできないような問題もよく見られますが、近年はボランティアとして司法書士や医師など専門家の方々も協力して下さるので、解決しやすい環境が着実にできてきています。また、相談会では希望者に生活保護申請の時にスタッフが付き添うことも受け付けています。今年度は一回の相談会あたりだいたい3~4名程度希望されました。例年に比べると相談会の場で受け付けた同伴件数は減少しています。これは来場者数の減少に加え、夜回りの場でも付き添いを頻繁に受け付けるようになったことが原因だと思われます。詳しくは後の章で記述されます。

③散髪

相談会の場では来場者の散髪も行っています。北海道民主医療機関連合会（民医連）から理容師の方を紹介していただき、毎回20名程度の散髪をしています。野宿者は髪を切る機会にはあまり恵まれていないので、大変好評を博しています。

④催し物

2月の炊き出しでは来場者との交流の一環として初めて「ビンゴ大会」が開かれました。おかげで会場は盛り上がり、多くの来場者に楽しんでいただけたようです。今後もただ単に食事や物資を配り、相談を受け付けるだけではなく、楽しくよい雰囲気になれるような企画を考えていく予定です。そして、このような催しをきっかけとして、より密に当事者と関わっていき、自立の手助けがしやすくなるようなになればと思います。

⑤他団体との協力

今年度は、他団体と協力して相談会を行うようになり、これまで地道に続けてきた活動が少しずつ広がりを見せています。5,6,10,11月の「炊き出し・総合相談会」はNPO法人ハンドインハンドとの共催で行われました。特に、11月の相談会はハンドインハンドが中心となって行われ、おかげで普段と比べて食事の提供や衣料品の配布といった面で充実した相談会にすることができました。今後もお互い積極的に情報交換を行い、よりよい相談会ができるようにしていきたいと思います。また、12月には札幌司法書士会の主催で「炊き出し・法律相談会」がありました。専門家の方が主催したため、この会は通常よりも法律関係に特化した相談会になりました。借金など、法律に関する問題のわかりやすい解説

も行われ、来場者は真剣に耳を傾けていました。今後も、それぞれ得意分野を持つ団体とより一層協力していき、多くの当事者をうまく意に添える形で助けられるようになればと思います。

⑥札幌市との共催

5,6,10,11 月の「炊き出し・総合相談会」はハンドインハンドとの共催であるとともに、札幌市との共催でもあります。5,10 月には、区役所職員による生活・福祉相談や、ハローワーク職員による就労相談、札幌弁護士会による法律相談、札幌こころのセンターによる精神保健相談などいつもより幅広い分野での相談が行われ、加えて健康診断（検尿・血圧測定・血液検査・X 線検査）も行われました。そして、6,11 月にはその健康診断の結果が配布されました。なお、来年度も 4 回、同時期に札幌市との共催を行う予定です。今後も、市との共催を続けていく中で、野宿者と行政との隔たりが緩和できるようになればと思います。

図表 5-1:本年度相談会の来場者数

日付	来場者数 (人)	特記事項
5 月 21 日	87	ハンドインハンド・札幌市と共催
6 月 25 日	69	ハンドインハンド・札幌市と共催
8 月 20 日	46	
10 月 1 日	55	ハンドインハンド・札幌市と共催
11 月 5 日	50~60	ハンドインハンド・札幌市と共催
12 月 4 日	50~60	札幌司法書士会主催 法律相談会
2 月 4 日	53	ビンゴ大会

<生活健康相談会の様子>



6. 他団体・機関との連携

今年度も会員以外の方々に支えられ活動を進めてきました。物資提供やご寄付、また活動に便宜をはかっていただくなど様々なご援助をくださった皆様に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。また、今年度は多くの団体や機関との連携なしには語るができないくらい、他団体・機関のご協力に支えられ活動してきました。ここでは、今年度の他団体や機関との連携について報告したいと思います。

昨年度に引き続き、今年度も「ホームレス」支援団体との関係がより広がり深まった年であったといえます。在札の支援団体の NPO 法人ハンドインハンドさんとは、昨年度同様、札幌市との共催となった「総合相談会」における民間サイドのパートナーとして共に活動を進めてきました。昨年度の総会では「総合相談会」前の打ち合わせ不足が課題として挙がりましたが、今年度はそれをふまえ、積極的に情報交換を行い、11 月には初のハンドインハンドさん主体となる市民会館での炊き出しを成功させることができました。当会で十分な支援の出来ない衣類提供などの面においても、来年度も連携を深めることでより充実した活動としていく必要があるでしょう。また、「北 26 条教会」さん、「マナチャペル教会」さんにはともに、炊き出しの準備の会場を貸していただきました(順に 6・2 月、8 月)。7 月には全国の野宿者支援団体の交流会・『寄せ場交流会』に当会スタッフ 4 名が参加させていただきました。民間団体による野宿者支援の盛んな本州の実例から学ぶべきことは非常に多く、今後の活動の参考にさせていただきたいと思います。

また、他の自立支援団体との新しい関係もつくる事が出来ました。今年度中頃から、当事者をアパートに住ませ就労支援を行う「なんもサポート」さんの活動が始まり、当会を經由してこの就労支援を受けられた野宿者が 7 名ほどいらっしゃいました。このことで野宿者の、脱野宿・そしてその後の自立のための有効な手段がまた一つ増えたと言えます。近年は稼働能力の十分にある若い野宿者が増えてきていることもあり、そのニーズに答えていくためにも、「なんもサポート」さんとの連携をますます深めていく必要があるでしょう。

今年度はまた法律の専門家との関係も広がりました。昨年度後半から札幌司法書士会の有志の方々が当会の活動に積極的に参加されていましたが、今年度は借金問題の解決法についての学習会を開催して頂いたり(10 月)、また 12 月には当会と司法書士会との共催の法律相談会を成功させることができました。野宿者の中には借金等の問題を抱えている方もおり、このような連携は支援を効果的なものにするために来年度以降もより深めていく必要があるでしょう。また、司法書士会主催の、「NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい」代表・湯浅誠さんによる講演会も実施され、当会からも多くのスタッフが参加させていただきました。野宿者、元野宿者、DV 被害者等の幅広い生活困窮者の支援をされているもやいさんからは、今後の当会の活動に関して様々なヒントを頂き、非常に実りのある講演会となりました。

次に、当会の活動に力を貸して下さった諸団体について報告します。昨年度末から、炊き出しの際の食事の準備を幾度も、西区の弁当屋・山の手屋さんをお願いしています。山の手さんが格安で用意して下さった食事は、参加者に大好評を得ています。どうもありがとうございました。来年も是非、当会へのご協力をお願いいたします。北海道民主医療機関連合会(民医連)さんからも、古くから当会の活動にご協力いただいております。今年度も以前と引き続き、炊き出しの際の医療/散髪コーナーに専門家を紹介して頂きました。適切な医療は野宿者にとって最も必要なニーズの一つであり、散髪は参加者からいつも好評を得ております。来年度も引き続き、民医連さんとの連携が継続することを期待しています。

最後に、行政機関との関係です。今年度も当会と札幌市とは、年4回の「総合相談会」の共催(5・6・10・11月)、野宿者人数調査の受託実施(10月)、意見交換会の実施(3・5・9・2月、'06年3にも実施予定)等を行い、昨年度同様の協力関係を継続してきたといえます。また、8・9月には北海道庁との意見交換会も行われました。しかしこうした連携を取りつつも、札幌市を含め行政機関の「ホームレス」支援に当会の意見はまだ十分に反映されているとは言えません。区役所の窓口レベルにおいてさえも、いまだに生活保護申請を希望される方が厳しい対応を受けることは少なくなく、こうした現状は数年前から変化していません。これらは、当事者個人や支援団体のみが抱え込む問題ではなく、行政も対応すべき問題であることは言うまでもありません。ただ、よりよい支援のあり方を行政に提示することは支援団体の責任でもあるので、来年度以降は当会の意見・要望をより積極的に札幌市のみならず、道や国に対しても訴えていく必要があるでしょう。

★コラム★ クリスマスのプレゼントは一人の青年の人生を変えられるか

なんもサポート 中塚 忠康

私は昨年6月から縁がありまして、路上生活者の自立支援のために少しでも手助けができればと、労福会の活動に参加しました。振り返ってみると、数十人の路上生活者と出会い、喜怒哀楽を繰り返し、多くの支援者の協力、援助を頂きながら今日を迎えました。こうしたなかで、私たちの活動が目に見える形で結実した一例を披露したいと思います。1月4日、正月気分もまだ抜け切れていない早朝、体格のいい青年が北幌荘を訪ねてきたとの連絡が入りました。さっそく話を聞いてみると、クリスマスイブの早朝プレゼント行動で出会ったF君でした。F君とは、プレゼントの残りも少なくなってきた、はじめは暗かった空も明るくなり、そろそろ終了の頃だったと思いますが、Gビルのエレベーター前で、階上に行こうとしていたところで声をかけることができました。

「若いようだけど何歳」

「29歳です」

「そうか、頑張って、一日も早く路上生活から抜け出そうよ。」

「仕事をして自立しようという気持ちになったら、北幌荘に来てください」

と、名刺を渡していたF君でした。さっそく部屋に迎え入れましたが、F君は相撲取りのように体が大きく、どんぶり飯3杯は軽く、人なつっこい顔で、すぐにみんなの中に溶け込み、今では北幌荘の人気者になりました。また、仕事では就業のタイミングが合わずに、なかなか仕事に就くことができませんでしたが、今ではメンバーと一緒にがんばっています。F君は集団生活の中でなにかを掴み、二度と路上生活には戻らない環境を自らつくっています。F君の人生は一変しました。私は、早朝行動は眠たい、寒い、できれば労福会の若いメンバー学生さんに任せておきたい気持ちを振り切って参加しましたが、このような形で報われると大変うれしいし、今後もっともっと沢山のF君が生まれるように頑張ろうと思いました。

7. 野宿生活から抜け出すためのお手伝い

「野宿から居宅生活に戻ることは、野宿者支援の活動を続けるなかで、最も不可欠な至上命題のひとつといえます。そこには、「どういうケースであっても、野宿という状態で生活を送ることは、やはり望ましくないはず」という当会の考えが根底にあります。

もっとも、「より人間らしい生活」というのを当会が一方的に決めつけてしまうことには、不快を感じる野宿者も少なくないはずで、これまで、夜回りや炊き出しなどを通じて知った、氷点下のなか、毛布一枚で夜を明かさなければならない、食事すら満足に取れない、体の具合が悪くても治療できないような状況。それらは、野宿が「人間の生活環境」として決してふさわしくないことをぼくらに痛感させます。それと同時に、野宿者が願うかたちで、状況の打開を模索しなければ、「脱野宿」が成就しないことも肝に銘じなければなりません。

「脱野宿」について考えることは、とりもなおさず、「野宿者の抱えている問題」と向き合うことでした。ここでの「問題」とは、仕事ができない、借金を抱えているといった経済的な厳しさと、人間関係や社会的つながりにおける精神的な厳しとがあります。行政等の対応は、どうしても「脱野宿」の問題を経済的な側面のみでとらえようとするあまり、野宿者の抱える精神的な側面を、あまりに個別的であいまいであるがゆえに、視野の外に追いやってしまいがちです。この視点のずれをしっかりと結びつけ、精神的な側面からの自立をも考えるのが、労福会が取り組んでいる「脱野宿のお手伝い」の姿勢といえます。

その意味するところは「野宿者との関わり方」につながります。求められるのは、野宿者を「脱野宿」と称して、「自立の強制」に引きずり込むのではなく、野宿者1人1人の生き方を優先しつつ、個々の抱える問題に対して、どう支援していくのかということです。たんなる知識だけに頼らず、「何かお役に立てないか」という態度で一緒に悩みながら地道に関わったとき、本当の信頼関係がつくられてくるのだと思います。そのプロセスのなかで、脱野宿そして社会的つながりをもった生活をふたたび回復してもらうことをめざしています。

7-1 生活保護につなぐための付き添い支援

たとえば、「生活保護」を受けるため、野宿者が、たったひとりで、区役所を訪れ、保護課の担当者との面接を行なったとして、どうなったのか。面接後の帰り道では、野宿者たちから、「うまく話せなかった」という声が聞かれます。彼らのなかには、少なくない割合で、自分の思いを他人に伝えることが苦手という人たちがいて、自らの窮状を訴えるべき重要な場面で、萎縮したり、区役所の面接官の意見にながされて、胸に秘めた思いを伝えられず野宿へ戻ってしまうケースが後を絶ちません。彼らの多くは、「やっぱり俺には、生活保護はダメなんだ」という挫折感だけが残り、「脱野宿」の意欲そのものを失ったのです。

野宿者が、身寄りも仕事も見つからず、生活保護に頼る場合、①病院に入院（健康上の問題があるとき）、②明啓院という施設での就労支援を受ける（即就職が可能な場合）、③救護施設での一時的な保護（高齢や即就職に結びつかない場合）、④保証人等の必要ないアパートを自ら探して、そこで生活保護を申請、⑤今年度からはじまった「なんもサポート」による支援（p16 コラム参照）等が考えられます。今年度の付き添いの結果は、図表 7-1 の通りです。当会の付き添い支援は、ひとりで生活保護の申請をためらう野宿者に付き添い、区役所、病院、アパート探しといった場面で、その都度、個々の必要に応じたサポートを行ないつつ、居宅生活に至るまでに遭遇する出来事を一緒に経験していきます。身寄りもない、お金もないという現実を背負った者にしかみえない「脱野宿」の苦悩は、彼らと行動を共にすることではじめて気づかされます。うまく意思を伝えられない場面での代弁、辛い時の励ましなど、彼らとともに歩く「脱野宿」の伴走者としての役割が付き添い支援には求められます。そしてそこで成功した経験は、「野宿のままでいい」という野宿者に、声かけを続けるなかで、「脱野宿」という生き方をあらためて考えてもらう「道しるべ」にもなっています。

とりわけ、働ける年齢でいて、健康な野宿者が生活保護を求めるとき、区役所から「近い将来、自立できるという予測」、つまり「仕事を選ばず、強い自立の意志があること」をあらゆるかたちで表現することが要求されます。それは、就職活動の記録であったり、時には、熱意ある決意表明であったり。今年度、生活保護の申請で、最も印象深く、苦しめられた出来事といえば、申請窓口での就職先の紹介があげられます。

「仕事なら紹介します。本気で自立する意志があるのなら、仕事を選ばずにこちらで働いてみて下さい」。このような窓口の対応は、区役所で「紹介された仕事」が「自分の好まない条件の仕事」であったとき、野宿者を困惑させます。もし、その仕事を断ったとしたら、「仕事を選ぶ」、「自立の意志が足りない」とみなされてしまうからです。少なくとも、区役所の担当者にそうみられるのではないかという恐怖に怯えています。こうして、「やっぱり俺には野宿しかない」とあきらめ、二度と区役所へ足を運ぼうとはしなくなるのです。

同様に、今年度目立ったケースとして、再野宿者の問題もあげられます。かつて生活保護を受給したにもかかわらず、その間に就職できず、生活保護を廃止された人たちが、また野宿生活に戻ってきています。この場合も、生活保護の再申請は、「自立の意志が弱いからだ」と、なかなか認められません。

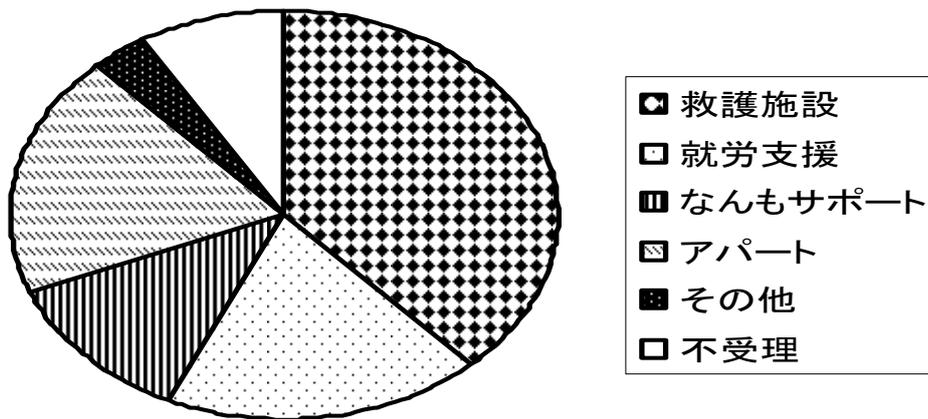
「脱野宿の希望」をいったん断絶された野宿者は、ぼくらには到底推し測ることもできない絶望、悔しさと闘わなくてはなりません。これらのケースに共通するのは、「脱野宿したい」という一番大切な本人の意欲そのものが奪われてしまうことです。一度失った意欲を戻すには時間がかかり、生活保護につなげることも容易ではありません。当会が、付き添い支援をするなかで、そういう彼らの内面にこそ目を向ける必要があるのです。

一方、行政のこのような態度について、札幌市の保護指導課と何度か話し合いましたが、札幌市の姿勢が変わることはありませんでした。現在、行政等の「脱野宿」を取り巻く状

況は、「うまく自分を相手の要求どおりに合わせられない野宿者」を、「切り捨て」というかたちで露呈しています。それゆえ、当会は「拒絶」された野宿者へのフォローアップに力を入れました。あきらめかけた野宿者を手間ひまかけて説得し、本人のやる気を引き出していく支援が必要だったのです。そして彼らを積極的な姿勢に体質改善していくなかで、どうにか生活保護につないだ1年であったように思います。

図表 7-1: 生活保護申請同伴の結果

<結果>	救護施設	就労支援	なんもサポート	アパート	その他	不受理	合計
<人数>	22 人	11 人	7 人	11 人	2 人	5 人	58 人



7-2 居宅生活後に必要な支援

生活保護申請の付き添い支援をはじめた頃、当会では、居宅生活へ移ることが「脱野宿」の最終地点だと考えていました。しかし、「居宅生活＝自立生活」という思いは幻にすぎなかったのです。その後には、就職できないあきらめ、生きがい感の喪失、生活保護廃止へ不安、最悪なケースとして再野宿へ戻るといった事態でした。

人は誰しもパンのみで生きているのではなく、精神的な支えとなる生きがい、たとえささやかなものであっても、生きる糧となるものがが必要です。ところが、生活保護受給後に待っていた居宅生活は、社会から距離のある「孤独」そのものだったのです。

これまで、居宅生活者に当会が関わるものとするれば、当会の連絡先を伝えること、年賀状を送り、継続したつながりがあると知らせること、「脱野宿」の付き添い支援の延長として、メンバーが個人的に連絡を取りあい、相談に乗るといった類のものです。そうしたなかで、居宅生活者による再野宿が増えはじめ、同時に、居宅生活者と関係の深いメンバーから、居宅生活後、特有の悩みを持っているという報告が事務局会議でなされるようになってきました。こうして、居宅生活者追跡調査がはじまったのです（図表 7-2 参照）。

調査結果には、これまでプライベートな問題として表面化することが少なかった、「相談相手がない」、「区役所のケースワーカーとうまくコミュニケーションがとれない」、「気持ち落ち込んでくる」といった悩みのほか、なかには「気持ちのよりどころがなくギャンブルに走ってしまう」、「野宿期間の習慣を直すのに苦労している」といった、人間関係、精神的な領域に起因する悶々たる思いが語られていました。これは居宅後の「生きがい」の問題に光をあてるたいへん興味深いものだったといえます。仕事もなく「地域社会のなかでの居場所がない」状況下で、生きがい感を喪失しない人間がいるとしたら、例外的なケースといえるでしょう。「居宅生活」のはじまりは、「自立」へ向けた 2 回目の過酷な試練であったのです。

居宅生活後にも、やはり居宅生活者の拠り所となる支援が必要でした。しかし、居宅生活後は「もう野宿のことは忘れたい。だから支援者ともあまり関わりたくない」という本人の思いもあって、音信不通となるケースが多く見受けられます。とりあえず、現在は、居宅生活後、困ったときに当会と連絡がとれるよう、「SOS はがき」を配り、少しずつではありますが、継続支援に力を入れ始めた段階です。そのなかで当会が早急に取り組まなければならないのが、「生活保護の廃止、そして再野宿」をいかに食い止めるかということでした。居宅生活者たちは、仕事が見つからなく、自立の意志が足りないと判断されると、区役所から「保護指示書」、「保護指導書」が送られてきます。多くは、それを受け取った後、どうしていいのかわからなく、与えられた弁明の機会もうまく活用できぬまま、保護の廃止に至ってしまったのです。これは、居宅生活者の抱える問題だけでなく、区役所のケースワーカーとのやりとりも深く関係していると思われます。そこで、札幌市に「保護指示書」、「保護指導書」「保護停止通知書」の情報公開を求めました。それを検証し、居

宅生活の諸注意とアイデアを載せた『居宅生活ハンドブック』がようやく完成したところです。これを今後、居宅生活者に配布していく予定です。

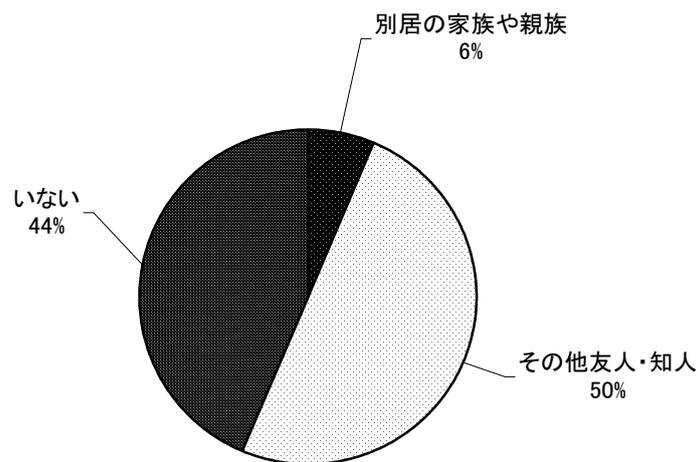
なぜ彼らは、保護の廃止を、なす術もなく受け入れてしまったのか。そういった当事者の気持ちは、第三者には永久にわからないことなのかもしれません。「脱野宿後の自立」というのは、ある達成されるべき状態があるわけでもなく、1人1人の生き方のなかで多様な「かたち」があって、当会はそれを最大限尊重すべきなのです。当会が彼らと一緒につきあい続けるなかで、彼らにとっての「自立のかたち」が、自然な流れでうまれてくるはず。そういう願いを込めて、日々「野宿生活から抜け出すお手伝い」を続けているのです。

図表：7-2 居宅生活者追跡調査の結果（一部抜粋）

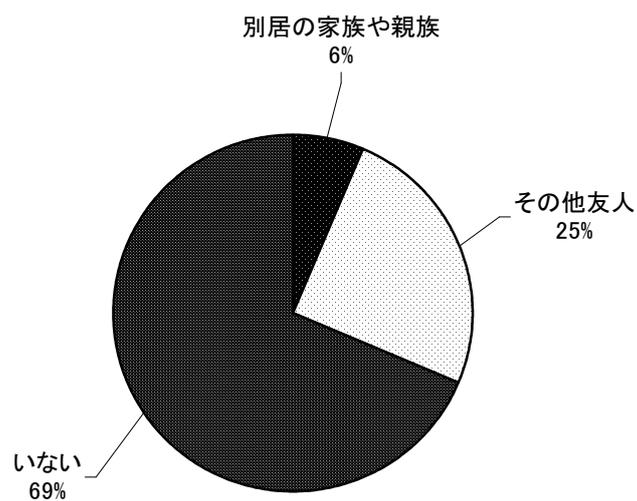
居宅生活調査 2004 年 12 月から 2005 年 5 月まで実施

有効回答者 計 16 名

「個人的な悩みや心配事を聞いてくれる人」（複数回答）



「病気の時に看病や世話をしてくれる人」（複数回答）



8. 会計報告

省略

9. 来年度にむけて

北海道の労働と福祉を考える会発足からこれまでの歩みを、改めて振り返ってみますと、当会発足時の札幌では、野宿者を支援するという活動はまだまだ目新しく、多くの市民が野宿者の存在すら認知していないという状況でした。しかし現実には当時も現在も、真冬の札幌に野宿者は確かに存在しており、飢え・孤独・そして厳しい寒さの中で苦しんでいる人々がいます。ちょっとした不運の連鎖によって、厳しい野宿生活を強いられている方を、これまでに私たちは沢山目撃してきました。「好きでホームレスをやっている」という言葉は、世間の偏見、もしくは野宿者自身の強がりにはかすぎないということを、調査活動や野宿者との関わりの中から労福会メンバーが経験として感じ取ってきました。

このような現状を受け、何か自分たちができることはないか模索していく中で、始めはエルムの里公園での小さな炊き出しから活動はスタートしたわけですが、炊き出しのような一時的支援に対しては、市民からも野宿者側からさえも疑問の声が寄せられました。中には「公園の鳩に餌をやっている迷惑な偽善者と一緒だ」というような痛烈な批判の声もありました。そうした周囲の声と向き合いながら、私たちは彼らの「自立」につながる支援を考えて取り組むようになり、活動の中心は生活保護制度を利用した野宿者の脱路上支援、つまり生活保護申請の付き添いへと移っていきました。やがて、生活保護というのが決して彼らのゴールではないということにも、私たちは当事者との関わりの中で気がつかされることとなります。一度脱路上を果たしても、また再野宿になってしまう方があまりに多かったのです。これには私たち自身の無力感と生活保護制度の限界を感じずにはいられませんでしたが。こうして現在私たちは、居宅後の方（元野宿者）に対する支援についても、真剣に取り組んでいく必要性をメンバー全体が強く感じ、やれることから具体的に動きだしたところであります。

今後の労福会が、このように当事者のニーズに合わせて活動内容を柔軟に変化させていく中でも、ずっと変わらずに持っているべき部分は、私たちが野宿者に寄り添い彼らをよく知ろうと努力する姿勢であると考えています。この姿勢について、今年度の活動に関しては、夜回りの活動の定例化によって、より具体化することができました。毎回の夜回りで継続的に関わることで、徐々に野宿者たちが私たち労福会に対して心を開き、頼りにしてくださるようになっていく変化を、支援者一人一人が感じとることが出来ました。このような体験は労福会の活動の原点にあたるものだと思います。夜回り活動は内容を熟考・改善しながら、来年度以降も継続していきたいと考えています。

労福会のメンバーは移り変わり、先に述べたような当会発足からの流れや初代メンバーの思い等を全て解っていて、現在も継続して活動をしている人は少なくなっています。毎年度新しいメンバーが中心となって活動するので、先輩方のやってきた活動を維持・模倣していくことに必死で、活動を再考していくのが困難な状況であるのも確かです。学生主体でやってきたということによる当会の一番の至らない部分であると言えます。しかし、

難題ではありますが、労福会は何か新しい物事を調査・実践して、失敗を恐れずチャレンジしてみるべきであると考えます。なぜなら私たちの「行動」は、社会への問題提起になりうるからです。例えば、当会がかつて担っていた野宿者への「健康診断」を、今では札幌市と共催で行う生活健康相談会でより本格的に行うようになってきていることに表れているように、私たちが何か新しい問題に取り組み、社会に提案していくことが重要で、やがて支援の輪は広がっていくものだと思います。

今後は行政や他支援団体との連携につきましても、課題は増えるでしょう。互いの得意分野を持ち仕事を分担しながら、いつでも情報交換がスムーズにできるような関係づくりを進めていくことが重要です。それには今まで以上に意見交換を密に行うことが必要であり、そのような支援ネットワークは当事者にとっても大いにメリットのあることです。そして同時に、このような支援ネットワークの中で求められてくるのは、私たち北海道の労働と福祉を考える会のオリジナリティであると思います。先に述べたように、当会は時代とニーズの変化にそって少しずつ活動を変化させながら、社会に提案していく立場であるべきだと思います。そして、野宿者の「脱路上と自立」を支援する団体である以上、今後益々居宅生活者支援に力を入れていくというのは、自然な流れであるとも言えます。だからこそ来年度以降の事務局に期待するのは、居宅生活者支援の更なる具体的実践です。今後ともやれることから一歩ずつ、知恵を絞って精進していきたいと思っています。

10. 私と労福会

小笠原 淳(フリーライター)

『狂おしの豚汁』

しっかりした記憶は、豚汁の芳香のみなのだった。

あやふやな記録とさらにあやふやな記憶とによると、労福会という団体が札幌にある、おもに北大の学生や先生たちが参加している、おもにホームレス調査・支援に励んでいる—ということを知ったのは 2001 年 10 月 13 日土曜日の午後 6 時ごろだった筈である。と言っておいて舌の根も乾かぬうちに実は違っただけということに気づいた。その前日つまり 12 日の午後、当時賑わっていた通称テント村本名北 6 条エルムの里公園に、やはりホームレス支援に取り組んでいた北二十六条カトリック教会のカツヤ司祭がお出でになり、テントの皆さんに何かかためになる紙を配ったりしていたのだが、その場に若いひとがふたり駆け付けてちょっと深刻な顔でカツヤさんと情報交換なんぞなさり始めたのである。今思えばふたりはどう考えても労福会のメンバーであった。男性ひとり女性ひとりのペアである。当時私は 32 歳のナイスガイだったのだが、どういうわけか同世代の女性たちにはそのナイスぶりがうまく伝わっていなかったらしく、さっぱりもてないロンリーガイでもあった。ついでに言うとドラックガイでもありスモーキングガイでもあった。ために、若人ふたりに遭遇した時に真っ先に思ったのは、こんなうら若いお嬢さんがなぜこのような地味な活動を、ということであった。うら若い青年については、申し訳ないがまったくその詳細を憶えていない。ナンブさんだったかもしれないし、タローさんだったかもしれない。もしかしたらササキ先生だったかもしれない。今となっては別にどなたでもいいが、実は全然違ってそのお嬢さんの彼氏だったりしたら、ちょっと残念である。

エルムの里公園に入り浸ろうと決めたのは同月 10 日のことだったから、労福会には 3 日目にして接近を果たしたということになる。4 日目の夕、つまり冒頭に記したところの 10 月 13 日には、そのやたらに長い正式名称も知ることができた。邂逅の現場は、中央区の札幌市民会館。同日午後からテント村の皆さんがなぜかそわそわし始めて、陽が暮れかけたところにヤマギワさんがブーチャンに「行くんだべ」というように声を掛けたりする、そういう光景が公園のあちらこちらで展開された。何ごとかと思ひ、どこに行くのかと尋ねたところ、「一緒に来ればわかる」ということになったのである。言うまでもなく、今に続く炊き出しが当時すでに定番の行事として根付いていたということなのであり、16 人いたエルムの里住民の 9 割近くが、つまりたまたま不在だったひとを除く全員が、薄闇の中を市民会館めざしてばらばらに行軍していったのである。

そこに、豚汁の芳香は充満していた。

腹が減っていなかった筈の私は、途端に激しい空腹を覚えた。ほとんど飢餓状態に陥り、餓死の恐怖に見舞われた。そのころ、32 歳のナイスガイたる私は珍妙なこだわりのようなものを抱えていて、取材をする者はスポーツの現場に佇む審判員のようにあらねばならん

という、何だか阿呆な主義を拵えていた。そもそもそんなことは不可能である、というか積極的に現場に関わって取材行為がもたらす影響というものを常に自覚し続けていなくてはならん、という考えに到るのはその数週間後のことである。そして、その日まだ阿呆だった私は、豚汁とお握りを受け取る、あの旨そうな豚汁と旨そうなお握りを受け取るブーチャンを恨めしそうに眺めていたせいで、彼に「なんでメシ貰わないの？」と狂おしい勧誘をされてしまったのである。もちろん豚汁とお握りを、あの旨そうな豚汁とお握りを頂戴することはなく、死にもの狂いで腹を押さえてしのいだのだったが、以後その場で労福会の皆さんにどんなお話を伺ったのか、そもそもどなたにお話を伺ったのかは、ものの見事にまったく憶えていない。ただずっと腹が鳴っていたことだけはくっきり憶えているのである。

その日から 5 年 4 箇月の間で、私はずいぶんいろいろな路上のひとたちにお会いすることができた。労福会にも次々に新しい会員が加わって、なんと、今やあのマナベさんとかカマスズさんとかもほとんど会員のようになっていたりして、極めて贅沢な出会いを経験することができた。この 5 年間で路上の状況が少しずつ変わっていったのは、あきらかに行政や報道機関のお手柄などではなく、労福会を始めとする実戦部隊の活躍によるものである。それ以前のことはよく知らないが、私が彼らにまわりつくようになってからの 5 年間については、間違いなくそうなのである。

相変わらず好き勝手に現場を覗いて労福会の活動を邪魔し続けている私も、あの旨そうな豚汁にはまだ手をつけていない。未だに阿呆は治っていないが、路上の事情を知るにつけ、一滴でも多くの豚汁をホームレスの皆さんに味わって戴きたいと、こういう殊勝なことを考える側面もかろうじて持ち合わせているのであり、まだかすかにナイスなのである。まじめな若人たちは、何かと集まってあれこれの活動に励み、ひと仕事終えるたびに活動を顧みてあれこれの考えを巡らせている。新しいことに取り組むたびに新たな課題を抱え、それを乗り越えてはまた次の問題に直面している。動くほどに責任は増え、使命が広がり、そのすべてに正面から取り組んでいる。今さら贅言を要しないが、私にはとてもできない。その場においても何の役にも立たず、ただお嬢さんの写真を撮ったりお茶を飲んだり血圧を測ったりしているだけである。ただ一、

もしもその活動が行き詰まったり、何やら厄介な壁にぶち当たったりするようなことがあったら、若人よ、いつでもナイスガイ、否ナイスおっさんに相談したまえ。その時こそ私は、これ以上ない、最強の助言を、惜しまず君たちに与えてあげるから。

「とりあえず、豚汁だ」

豚汁があの狂おしい芳香を放ち続ける限り、路上はあまねく救われる。

小野 貴章(北海道大学経済学部 1 年)

自分は労福会にはあまりいないタイプだと言われます。どちらかというと普段からへらへらして遊んでばかりいるし、サークルやバイトなんかに熱中している普通の大学生です。実際、ホームレスの実態に興味があったりしたわけでもありません。ただ椎名先生の授業を受けていたから（椎名先生はホームレスの専門の授業をしているようです）、という理由で、半ば強制的に1回目の活動に参加させられました。しかし、その1回で辞めることなく現在も活動を続けていますし、これからもこの会に関わりたいと思っています。どうしてそのように感じるのでしょうか？自分なりに考えてみました。

それはおそらく、この会を通してホームレスの人に関わりたいという学生や、地域の方との出会いがその理由だと思います。みんな1人1人違う考えを持っていますが、札幌のホームレスの問題をどうにかしたい、という共通の意思を持ってこの会に参加しています。

労福会は、遊んでばかりいる自分を立ち止まらせます。立ち止まらせて、世間で起きている問題に目を向けさせます。自分を普段の生活とは異なった環境に身を置かせてくれるのです。それは自分の大学生活への大きな刺激となり、経験となり、大きな成長の糧となってくれると思います。労福会に入らなければ、ホームレスの問題にこんなに興味を持つ事もなかったでしょう。書店にマンガを買いに行くときに、つい「生活保護」のコーナーに目が行ってしまうなんてことも・・・。

菅 洋一(北海道大学教育学部 4 年)

大学2年の時に参加して以来、会の活動にちょくちょく顔を出させてもらいながら2年ほどの月日が経ちました。活動内容を一言で括ると「路上生活を強いられる人達への支援」と言えますが、今まで活動に参加した中で私が感じ取ってきたことを伝えたいと思います。

路上生活者、一般的には“ホームレス”と呼ばれている人達について、「怖い」という見方をする人は少なくないのではないのでしょうか。ですが彼らと話してみると、陽気に自分のことをたくさん語り出す人や穏やかな雰囲気ですぐ優しく会話してくれる人の方が多く感じられ、「怖い」というイメージとはだいぶかけ離れています。普段話す相手がなかなか見つからないのか、一度喋り出すと止まらなくなる人もいます。炊き出しや区役所などに同伴した後、最後に「ありがとう」という言葉を口にしてくれたりもします。気さくな人が意外と多いのです。

素性のわからない人を不信に思うのと同様に、接したことのない人、つまり未知の相手に対してその人を知らないまま不安や恐怖を抱いてしまうことがあります。しかし路上生活をする人へのその見方は必ずしも正しいわけではなく、その見方が多くの人に広まるほ

ど彼らは孤立していき、路上から抜け出る機会からも見離されてしまいます。寝ている場所が路上であっても、元を正せば彼らはれっきとした社会の一員です。偏見を持つ前に、まず自分の目で物事を見ること。何が真実かを自分で見極めること。そんなこともこの会から学びました。そして路上生活者の実像を自分の目で見る機会を、「誰でも参加しやすい雰囲気」を目標に労福会は提供してくれています。一人でも多くの人が路上生活者の姿を知ること、少しでも彼らのことを理解すること、それが大きな意味での支援にもつながると私は考えます。会だけでは一から十まで彼らの支援をすることはできませんが、窓口となってたくさんの人に彼らの実像を伝えていくという重要な役割を果たしています。労福会という窓口を通して、私も彼らの実像を知りました。同様に、多くの人がこの窓口を通して路上生活者への理解が広まり、一人でも多くの人が路上から抜け出せるようになることを願ってやみません。

金子 倫大(北星学園大学社会福祉学部 3年)

～今の時代だからこそ求められる「心の通い合い」～

つい一ヶ月ほど前のことであるが、私は私立高校受験を控えた中学生に面接試験の模擬練習をしていた。「今の社会に足りないと思うものは何ですか。」という私の問いかけに、その中学生は「お金だと思えます。」と平然と答えた。私はその理由を尋ねると、「だって今の時代、お金が全てじゃないなんて言えなくない？」との返事が返ってきた。およそ幼さの残るその表情とは裏腹に現実的なことを話す彼女を目の前にし、私はいつの間にか自分がこれまでしてきたボランティア活動について考えていた。

私は高校生の頃から、様々なボランティアに参加してきた。労福会との出会いはまだそう古くはないが、ボランティアをするたびに、いつも考えることがある。なぜ自分はボランティアをするのか。なぜボランティアは必要とされているのか。言うまでもなく、ボランティアは無償の活動であり、それは労福での夜回り、炊き出しなどの活動も例外ではない。語弊があるかもしれないが、それではどうしてプライベートの時間を削ってでも私たちは今まで色々な活動をしてきたのであろうか。また、どうしてボランティアを必要とする人が世の中に多くいるのであろうか。私はこの二つの疑問は、実は同一の根幹からなるものと考え。それは、人間しか持ちえることのない、「温かみ」に依拠している。

確かに現社会の在り様を眺めれば、先の中学生が感じているように、残念ながら金がモノを言う時代とでもいうべきか、少なくとも資金がなくては生活ができないということは紛れもない事実である。特にバブルの崩壊後、人間は金に対して慎重に、かつ執着するようになった。私たちが生活費なしでは生きていけないのと同様に、労福会の炊き出し活動などに来場して下さる路上生活者の方々も、明日食べるものを買うだけのお金がほしいというのが本音であることは想像に難くない。

しかし、言うまでもなく私たち労福会は、路上生活者の方にお金を差し上げるという活動は行ってない。その意味では彼らのニーズに応えきれていないといえるのかもしれないが、それでも彼らが私たち労福との関わりを持ち続けてくれていること、毎回の炊き出しに来場し、私たちに気さくに話しかけて下さっていること、これはもはや、彼らとの間に理屈では説明の仕様がな「温かみ」「心の通い合い」ができている証拠であると私は考えている。心の通い合いがあるからこそ、ボランティアに参加する私たちもその都度新たな活力を持って精進できる、そして路上生活者の方々も、私たち労福会の至らない点も優しく見守り、コミュニケーションを図って下さる。金がモノを言う冷え切った時代である現代に、その概念とはおよそ相反するボランティア活動が生き残っているのは、私たち人間が、日常で希薄になってしまった他者との関わり、温かい人間味を感じることを求めているという証明なのではないだろうか。

労福会にはそうした、現社会が失くしてしまった大切なものを持ち続けているメンバーが大勢いると私は感じている。その中に私も加わらせていただいたことはこの上ない喜びである。人は悲しみが多いほど、他人に優しくできる。たくさん愛を受けてきた者こそ、他人に愛を持って接することが出来る。私は23年間というまだ短い人生の中でも、実に色々な方から温かい愛情をいただいてきた。労福会のメンバーもおそらくそうなのであろう。今度は私たちの番である。人間相手であるからこそ、あるいは人間だからこそ可能なふれあいを、今後も模索していきたいと願っている。

最後に、初心者私を快く受け入れて下さった労福会のメンバーの方々、「やはり人間同士のふれあいはいいものだ」と改めて思わせて下さった気さくな路上生活者の方々にお礼を申し上げ、今年度の締めくくりとしたい。

楠 高志(札幌司法書士会)

私がホームレスの人達に興味を持ったのは、平成17年2月に会の無料相談会で、破産申立を依頼され処理した事件がきっかけでした。その方は、家賃を払えなくなり、平成16年秋頃から路上生活をはじめたのですが、1月中頃胃潰瘍で倒れ、そのまま病院に入院しました。札幌市の職員が、生活保護の申請・退院後のアパートの斡旋などをしてくれたそうです。その人は、他人の言葉をよく聴く素直な人物でした。その事件の時に感じたのは、まずこの札幌にしかも冬に路上生活をしている人達が居たことを知って、驚きでした。

消費者問題を勉強するゼミで同じグループだった大田さんから、MLで労福会の活動を紹介され、参加しようと考えました。ホームレスの人達が気の毒だから何かをしてあげたいとか、行政が経済的な弱者を救済すべきであるとかの考えは一切無く、ただ興味があるからで、ホームレスの人達が何を考え何をしたいか知りたい、のが動機になっています。それに加えて、労福会のようにボランティア活動をしている人達にも興味がありました。

司法書士になる前と勉強期間中、手話の勉強を少しやっていた時期があつてろうあ者の運動にお手伝いなんかをしていました。活動家というなら当然手話通訳者で、その自己犠牲的な精神に尊敬の念を感じずにはいられなかったものでした。

湯浅さんのような活動家なら、自分の人生もそのけに目の前の問題に没頭しておられますが、私達普通の人間は、生活のために仕事を持ちながら余裕のある時間を運動に充てています。自分のことを運動員だと考えていますが、運動員も個々の特徴を生かして、役に立つことができると思っています。私は、自分が法律に関係のある仕事をしていることを特に意識しているわけではありませんが、ただ法律を知っていることが力になる、と感じることはあります。行政官庁が、生活保護受給の申請書を出されることに、どうして強く抵抗するのか、行政法を知っていればよく解ります。『行政法』という名称の法律があるのではなく、行政とそのサービスを受けようとする申請者の間のルールを定めた法律、主に「行政不服審査法」と「行政手続法」です。

昨年11月26日に初めて朝廻りに参加し、今は主に夜回りで活動しています。12月4日の炊き出し・相談会でのこと。私は朝から何も食べてなかったのも、思わずテーブルの上のお菓みに手を出しました。その時、隣に居たホームレスの人が、

「おまえが食べたらダメじゃねえか。俺達の方がなくなるだろ」

「そうでした。悪かった。勘弁して」

隣のテーブルから持ってきて、その人にあげて、取り繕う。

「サンキュー。……おまえ、仕事なにやってんの？」

「司法書士をやってます。」

「……？」

どんな仕事か知らないようでした。でも、その時の注意の仕方に親しさが感じられて、こちらが落ち込むこともなく、なぜか嬉しい記憶として残っています。もう一度会えば、判る。人とコミュニケーションを始める「声掛け」は、すばらしい事だと感じました。以前、筋ジストロで中途失聴者の或る人から言われた言葉。「始めた動機は何であれ、続けることが大事なんだ」と。

佐々木 宏(広島大学助教授)

「私と労福会」に文を寄せるのは数年ぶりになりますが、今回は書かないわけにはいかないでしょうね。何よりもまずは、年度途中に、突然、札幌を離れ、副代表職を投げ出した不義理をお詫びいたします。また、10月の号外には驚かされました。過分のメッセージを寄せてくださった皆さん、ありがとうございます。広島に来て半年、「やはり、佐々木

副代表など案山子のようなものだったのだなあ」と ML を通じて皆さんのご活躍を眺めていました。皆さん、一年間、本当にお疲れ様です。

貧困、ホームレスなどという、これまで日本では非常にマイナーな話題でしたが、最近、どうやら風向きが変わってきたようですね。テレビや新聞でも『格差社会』といった言葉とともに、生活保護やホームレスの問題がよく取り上げられるようになってきました。これは一面ではとっても良いことだと思っています。「北海道にホームレスなどいない」と言われていた労福の発足時には、日本にも野垂れ死に覚悟で窮乏生活を強いられている人々がいること自体を世間に知らしめることが第一のハードルだったことを思い出すと、活動の前提が市民に受け入れられつつあることは労福にとって追い風になることでしょう。しかし、最近の報道をみるにつけ、少し心配していることもあります。

ちょうど今日、広島から成田に向かう飛行機の中で読んだ新聞で、厚労省が来月から暴力団構成員に対する生保適用を厳格化するという小さな記事が掲載されていました。僕はこれを読んでイヤな気分になりました。というのは、この記事はたいした疑問もなく世間に受け入れられるんだろうなあ…と思ったからです。僕のこの文章を読んで「なぜ、暴力団を生保から排除してはいけないの？」と思った方もいらっしゃるかもしれません。ヤクザであるか否かは本質的に生保には関係ありません。細かいことは省略しますが、資産、扶養、稼働能力 etc.などの活用に問題があることや申告に虚偽があることは、生保の要件に成り得ても、これらはその人の仕事や商売には関係ないことですから「ヤクザだから」という理由は、生保を断る理由にはならないということです。でも、「ヤクザは生保を受けてはいけない」というメッセージには妙な説得力があるので厄介なんですよ。この説得力の背景には何があるのでしょうか。犯罪に近い(?)人だから、反社会的な・道徳的な人だから、それともヤクザという職業を選び生活に困ったのは本人の自業自得だから?…。いろんな理由はあるかと思いますが、『格差社会』ということで世間がホームレスに注目したとしても、どうも「助ける必要のある人」と「助ける必要のない人」という峻厳な分別は残りそうだということがひどく気になります。

同伴などをされた方はご存知かと思いますが、労福が関わっている皆さんの中には、世間の理解を得られにくい人生を送ってこられた方、また、愛されにくいキャラクターの方も含まれています。僕は労福会の真骨頂は「どんな人でも、本人が望む限り寄り添い続ける」ことだと思っていました。となると、労福会には「助ける必要のない人」は一人としていないということになるわけですが、これは、世間の認識と大いにぶつかることになるでしょうね。来年あたり、この二つ目のハードルに直面することになるのかもしれませんが、最終的には現役スタッフの方がご判断すべきことだと思っていますが、これからも「誰一人見捨てない」労福会であり続けますよう、期待を込めて、遠くから祈っています。

塩崎 満子(市民ボランティア)

市民で参加させて頂いている塩崎と申します。私が言いたいことは、生活保護申請の同伴の時に、学生さんと、私と、おじさんの三人で行けるようになったことが、とても「良い」ということです。自分だけで同伴するとどうしたらいいのか分からなくなってしまうような場面でも、学生さんたちと一緒に行くことで、いつもいつも解決することができるからです。本当に私は横についていただけ、という感じなのです。ただ心強いというだけでなく、様々なことを学ばせてもらっています。本当に皆さんに感謝しています。

あと、去年の高柳事務局長さん、篠原事務局長さんにはとてもお世話になりました。どうもありがとうございました。

篠原 睦(北海道大学教育学部 3年)

まずは今年度、活動をサポートしてくださった全ての皆さまへ。「一年間、本当に、本当にありがとうございました！」一人では何もできなくて頼りなくて怠惰でヘナチョコでお調子者な私が、おかげ様で労福会の事務局長という大役をやり遂げることが出来ました。心よりお礼を申し上げます。

今日は総会、ついにこの日が来ました。この一年間を、目を閉じて、しみじみ思い返してみると……ああ！だめだ！涙でキーボードが見えない！……なんだかふざけているみたいですが……だいたい真面目にこの原稿を書いています。「言葉にならない感情」とは、きっと今のような気持ちを言うのですね。今は未だ、気持ちが整理できずにいます。

歴代の事務局長同様(?)、日常的ストレスと肩の荷の重さで、アップアップだった時期もありました。でもそんな時に、私の終わらない言葉に辛抱強く耳を傾けてくれたり、メンタルアドバイスをくれたり、時にはコップに酒を注ぎまくって嫌なこと全部忘れさせてくれたり、取り敢えずほめて気分を良くさせてくれたり、裏からこっそり指示を出してくれたり、至らない部分を的確に叱ってくれたり、この仕事は任せてよと言ってくれたり……。そんな方々に支えられて、息継ぎしながらなんとか此処まで来ました。

そしてこの一年間は多くの野宿者と関わりました。夜回りや同伴では、毎回のようない新しい発見や心が震えるような出来事があり、おじさんたちからは色んなものを頂いたなあと思います。学生時代にこのような体験を出来る機会に恵まれて、自分は幸せ者だと心から思っています。今年度は活動の中心となって、がむしゃらにやってきたので、活動全体に客観的な評価を下すのが難しいですが、私としては(いろんな意味で)楽しい一年間でした。

そもそも労福会の活動にはゴールがないし、考えても正しい結論が出るものでもない、それでも会に関わった人ひとりひとりが感覚的に何かを感じ取っていく場ですよね。わたしの場合、野宿者が私のような小娘にご自身の内面を話してくれるようになる瞬間、世の

中が持っている可能性を信じられるというか、いつの日か地球から戦争や民族間の対立ともなくなつて、互いに和解して、もっと笑顔が増えて……そういうものを感じられるのです。まあそれはあくまで「幻想」であつて、世の中そうそう甘くはないけれど、それでも諦めちゃったら何にもならないし、今もしもやれることがあるならやれる範囲でやってみるのは悪くないなあと思います。どんな人間だって、きっとそれぞれが毎日を一生懸命にジタバタと生きているはずだから。なんだか居酒屋でのぼやき風になってしまいました。(笑) でもお願いだから最後にもう一度お礼を言わせてくださいよ。皆さま本当に一年間お世話になりました。来年度からも、地道にやっていきましょう。

諏訪 絢子(北海道大学法学部修士 2 年)

今年度をもって、労福会を卒業します。大学1年生の冬あたりから関わりはじめ、なんだかんだいって修士2年までの5年間関わってきてしまいました。本当に色々な方にお世話になりました。誰とはいえませんが、感謝しています。そして「最後に」といっては何ですが、労福に関わってきて個人的に学んできたことのまとめと、今後の労福に期待することの2つを書きたいと思います。エントリーシート風になってしまいますが、ご勘弁を。

まず、労福から学んだことについて。労福会から強烈に植えつけられたことは、「ホームレスの絶対的な味方になることを目指す」(*) ことです。これは言い換えれば、「自分以外の人間のためになることを本気で追求することをやめないこと」って感じでしょうか。労福会は、今も昔も組織としての理念が何もない不可思議な団体とみせかけて、実は、こうした、かなり明確な活動基準(*) を持っているように思います。私は常々「労福って何者なんですか？」ということ組織の内外で問いかけてきましたが、いつもはっきりした答えはなく、一部のカリスマから教えを受けつつ、翻弄されつづけてきました。でも、最後によりやく本性がわかってよかったです(笑)。そして、自分もそういう見えない基準に共感したから、やり続けられたのだと思いますね。共感したというか、「答えの出ないこと」だからこそ考え続けられたのだと思います。勉強になりました。ちなみに私がこれから入社する会社のコア・バリューは‘Real Partner’であり、労福イズムを英訳したものに過ぎません。労福のおかげで就職までできて、本当にラッキーでした。

次に、今後の労福に期待することについて。抽象的なレベルでは、(*) を追い求めていく限り、絶対つぶれないだろうなと思うので、(*) を如何に具体的な活動として実践していくかなのかなあーと思います。そして最近思うのは、自己資金比率アップの必要性です。労福のよさの一つとして「学生主体」がありますが、ホームレスのおじさんの人生を立て直す云々以前に、資金調達に学生が一番とつきやすい活動なのではないでしょうか。チャリティー・ショップを経営するまでは行かなくても、学祭で店を出したり、フリーマーケットをやったりして活動の資金を集めたり、ホームレス問題について世の中にアピー

ルしていくといったことは「できること」でしかも「効果的」なことだと思います。たぶん世の中の大人は、「自分で稼いでるか」ということをかなりシビアに見てくると思うので、そういった厳しい目をもった支援者を拡大するために何らかの形でぜひとも実現して欲しいです。

あとは「居宅支援の組織化」ですかね。夜回り、炊き出しなど、もう飽きがくるくらい組織化されていると思うので、気分を入れ替えも兼ねてチャレンジして欲しいと思います。新しいことをやる組織ほど寿命が長いらしい。リスクのあることをやる時は、自分についてよく考えるから成長するってことなのではないでしょうか。超偉そうなことを沢山書いてすみません。巷に出回っている自己啓発本の影響だとでも思ってください。今後の労福にめちゃくちゃ期待しています。(完)

世良 迪夫(北海道大学工学部 2年)

夜回りを頻繁に行うようになって、おじさん達と話をする機会が増えました。大抵は、缶コーヒーなど渡して、普通に世間話でもしてみたり、炊き出しの案内をしてみたりするのです。が、いざ相談事とか、生活状況を聞いてみると、正直言って頭が痛くなります。

この間も、「ただなんとか食いつないでいるだけ。全然やる気が起きない」みたいな人と出会い、どうしたらいいものか悩みました。励ましてみたりはするのですが、それと同時にたかだか20少しの年月しか人生を歩んでいない僕程度では、おじさんの重い思いをなかなか受け止めることはできないし、とうてい太刀打ちできないんじゃないのかな、と勝手に思います。結局そのおじさんとはもやもやした気持ちのまま別れることになりました。また会うこともあるでしょうが、その時はどういう話をすればよいのだろう、と僕の脳みそは考えています。

それでもまあ、おじさんの前を通り過ぎ深く関わらずにやっていくよりは、きっとプラス(お互いにとって)になるのだろうなあ、とも感じてはいます。

というわけで、来年度も関わり続けることを大切にして、地道にやっていきたいなと思っています。よろしくおねがいします。

寺林 泰亨(北星学園大学社会福祉学部 3年)

—不景気な時代のよりどころ—

私は、この活動に参加させていただくまで、街中で見かけるホームレスというものに対し、半ば偏見に近い知識しか持ちえていなかった。ホームレスはいったいどのような生活をしているのか、またホームレスになる以前にはどのような生活を営み、どのような経緯でそのような生活をする事となったのかなど、様々な疑問はあったのは事実であった。

しかしながら、なかなか話しかけるといふ段階まで至らなかったのが現状であった。知りたいという欲求はあったものの、なかなかそれを一個人の力で知るといふのは限界があると感じていた。そんな折、縁あって労福のメンバーとして活動させていただく機会を得た。炊き出しを中心に活動していくうちに、一つの問題意識が自分の中に出てきた。

私は大学で経済学を履修した。そこでは日本の現在の経済が非常に不景気であり、雇用もままならないということを知った。私の友人のタクシー乗務員がおもしろいことを言っていた。「10年前のバブルのときは、これほどいい仕事はなかった。ただ走ってるだけで客が手をあげる。ところが今じゃ、こんな仕事水商売といっしょですよ」いかに今の社会、就労している人でさえ生きにくいということを意味している言葉である。ホームレスもまた、こうした社会の犠牲者だと私は思う。誰も、望んで路上での生活など選択しない。そこまでは、大変な挫折と苦悩だけではなく、今の不景気な社会の裏切りがあったのだと私は考える。信じていた「社会」という枠組みからの裏切りは相当な辛さを受けるのではないだろうか。社会のために働いてきたのに、途端にその社会が私達を排除しようとする。これほど理不尽なことはない。それはなにも、ホームレスだけがそれを感じているのではなく、私達もまた、生きにくさを抱えていると思う。

労福は、こうした社会の中で、癒しの場の役目を担っていると私は思う。社会に幻滅したホームレスたちが、交流を図る場所として、それだけではない。私達ボランティアをする側も、ホームレスと接することで自分を成長させられる場所として。例えば、人間関係で傷ついていた人がいたとして、その人がぼくたちと話をすることで、もしかしたら、「ああ、会話ってやっぱりおもしろいな」と思ってくれるかもしれない。役所の対応に不信感を抱いていた人が、私達と同伴をすることで、少し自身を持って今後の生活についてビジョンを建てられるかもしれない。その一方で私達も、気分がすきんでいるときにホームレスの人とたわいない会話をするすることで、元気をもらい、路上生活をいろいろを聞くことで、現在の労福や社会に足りないもの考えることができている。この意味でも労福は、ホームレスと私達の「よりどころ」として私は考える。

労福は、学生が中心となったボランティア活動である。私達、少なくとも私は、まだ経験が浅く、ホームレスに対しても、至らない部分があるといわれる。ただ私は、その経験の浅さは、熱意を持ってカバーできると信じている。基本は、ホームレスと関わりたい、ホームレスのことを知りたいという気持ちだと思ふ。その気持ちを忘れない限り、労福は私達と、ホームレス双方にとってのよりどころであり続けるのではないかと私は確信している。

中村 ちひろ (北海道大学教育学部 3 年)

私が労福会の活動に参加するようになって早いもので2年近くが経過しました。私は、今年は何報係ということではりきって始めたのですが・・・有限不実行になってしまい大変申し訳ないです。来年こそは！！リベンジのつもりで頑張りたいと思っています。

今年、つかず離れずですが労福を事務局の中心のほうから見ていて、本当に事務局は大変だなあと思い続けた一年間でした。何だかそれに尽きる感じです。労福も発足してから6年以上が経過して、活動は次のステップに進むかどうか難しい段階にきていると思います。そんな微妙な一年間を乗り切った事務局長をはじめとした皆さんお疲れ様です！！

中山 治光(北星学園大学社会福祉学部 3 年)

2005 年度は個人的な事情が重なり、労福の活動に参加する機会が少なかった。断片的だが、来年度につなげるため、「野宿を生きることと地域で生きること」について思いつくことをノート風に記させていただきます。

印象に残った人に、夜回りの時に出会った二十歳前後の男性がいる。彼は、「家にいたら黙っていても親がご飯を用意してくれる」「路上での生活はすべて自分が決め、やったことはすべて自分にかかってくる」と話してくれた。ぼくは、生きる実感や生き方がつかめずに悩んだ自分の若い頃を思いながら、青年の顔を見つめた。どうしているのだろう。あれ以来、顔を合わせていない・・・。

夜回りでは、また、「なんで声をかける。炊き出しに来いとか、調子はどうだ、相談はないとか。おれは、ここでいい」と言われることもある。こんなことはめったにないのだが、こんな夜は特に、夜回りで出会う野宿者に野宿を生き抜いてきた力を、ぼくは感じる。労福会は、2004 年 12 月から 2005 年 5 月に野宿からアパートなど居宅に移られた方たちの調査をした。この調査にぼくはまったく参加できなかったが、ホームページ上の結果報告の中に「路上生活はしんどい（自分でもよく 6 年もやっていたと思う）。無理をせず、できれば脱路上してほしい」（居宅生活者・フォローアップ調査結果報告 2005/9/14）ということばを見た。この方が野宿を生きている人たちに伝える「無理をせず、できれば脱路上してほしい」ということばに込められた思いを深く感じる。路上から居宅への道のりは厳しい。さらに、居宅生活を維持していくことの困難があるといわれる。

2 月 12 日に、湯浅誠さんの講演会があった。湯浅さんは、野宿者をはじめとする生活困窮者（DV 被害者、精神障害者、外国人労働者）がアパート入居時に必要になる連帯保証人の提供を NPO 法人〈もやい〉で行っている。保証人提供した延べ人数は 900 人（野宿経験者は約 7 割、生活形態として 8 割程度が生活保護）、家賃滞納などのトラブルが発生し〈もやい〉が連帯保証債務を履行したのは 5%程度だったという話をされた。95%の人たちが保

証人の世話などにならずに自力で生活を営んでおられるということは、「ようやく手に入れたアパートを再び手放すようなことはしたくない」という必死の思いの表れだ。この実績を、もっと多くの方たちに知ってもらいたいと述べている。(当日配付資料 湯浅誠『格差』に抗するネットワークと法律家の役割～野宿者支援における連帯の現場から～)

2004年10月に行われた『北海道におけるホームレスの実態に関する調査』の自由記述欄に「まずは気楽にアルバイトができれば、少しずつステップアップできると思う(自分の現状にあった仕事をしていくうちに、野宿した心身が回復していくという意味だと思えます——中山注)。今は食べるに精一杯で、本格的に仕事探しができない。住居、身分証明書、連絡先がないので仕事につけない。解決策をさがしてほしい」と書かれた方がいた。これが野宿だと、ぼくは思う。

来年度も労福の活動に関りながら、野宿を生きている方とお互いの生を考えていきたい。

成田 允子(市民ボランティア)

貧者の一燈として昨年春から活動に参加させて頂いております。

以前は仕事として、路上生活者に接していましたが、こころを開いてもらうことが出来ず、入院途中で突然行方不明になったり、やっと入院まで漕ぎ着けた所で、もう、会ってもらえなくなったりと、難しい対応の数々でした。また、個人的に女性の路上生活者に食料品を手渡しても、拒否されたりしていました。

このような中で、労福のホームページを見てボランティアとして活動してみたいと思うようになりました。(活動時間帯が土日と夜間というのも勤務している私には好都合でした)

私は、還暦を間近に控え、ある程度世の中の事は知っているつもりでしたが、夜回り・炊き出しなどの活動に参加するにつれ、パチンコ店の騒音の中にただうずくまっている人、夜のバスターミナルの全ての階段に寝ておられる姿等を見て、この国の貧しさ、気持ちの荒廃さをまざまざと見せ付けられる思いがしました。

しかし、活動を重ねる毎に顔見知りの路上生活者が増えてきて、通勤途上で声を掛けて貰ったり、声を掛けたりと私個人と路上生活者の交流も出来るようになってきています。

さらに、私にとっては、労福会員の皆さんとの集まりは、まさしく異業種交流の場であり、ボランティアに参加していなければ、会えなかったような人たちと親しくお話させていただくのが、とても新鮮で楽しい場となっています。

私は、路上生活者の根底にあるものは、根深い人間不信ではないかと思っています。それが拭えない限り「自分は誰からも大事に思われてなんかいないんだ」「自分なんてどうなってもいいんだ」「放っておいてくれ」「よけいな世話だ」と言うのだと思います。

このような中で、私たちの出来ることは、夜回りや炊き出しを通じて「私たちはあなた

達のことを気にかけているよ」「私たちはあなた達の今の状況が、人間としての尊厳を保っているとは言い難いと思っているよ」というメッセージを発信し続ける必要があるのだと思います。そして、このような信頼関係の中から就労にチャレンジしたり、生活保護申請に踏み切ったりと、新たな一歩を踏み出せるようになるのではないかと思います。

出口の见えない路上生活者の状況をどのように打開して行くのか・・・ただ立ちすくんでいるような状況ですが、息の長い活動を続けて光を見い出したいと考えています。

また、若い学生さんの淡々とした、さりげない活動をみるにつけ「世の中捨てたものでもない」と思うこの頃でもあります。

微力な私ですが、時間の許す限り活動を継続したいと考えていますので、よろしく願いします。

南部 葵(労福会 SD)

忘れ物～フラノエクスプレスへの思いから～

…普通の男の子には、戻れなかった。

やはり、自分らしさに嘘をついてはいけない。つくづくそう思う。ぼくはなかなか、労福会から自立できない。なぜだろう。きっと、大人の世界が嫌いなのだ。

ぼくは、小さい頃、鉄道が好きだった。あまり家が裕福ではなかったので、鉄道を使って家族でどこかへ出かけた記憶はほとんどない。でもあるのだ。今は亡き「フラノエクスプレス」。先頭車に展望席が付いたリゾート列車で、何としても一番前の席に乗りたかった。小学校 2 年生のとき、改札が始まると真っ先にホームへ向かって駆け出した。決して足は速いほうではなかったが、一緒に駆け出した同年代のどの子供よりも早くホームへ着いた。「先頭席に座れる！！」はずだった。だが、先客がいた。入場券を買って、駅員による改札が始まる前に、もうすでにホームの椅子に座っていた。ぼくらが必死に走ってきた様子を見て、ゆっくり立ち上がり、あのフラノエクスプレスに乗り込んだ。それだけなら許せる。でも彼らは乗客ではなかったのだ。

その先客は、後から来た乗客に、何事もなかったかのように先頭席を譲った。しかもお金を渡されてだ。要に、席取りの人間だったのだ。彼らに恨みはない。憎かったのは、お金を渡して苦労せず、子供たちの憧れの先頭席を獲得した大人たちだ。だから嫌いなのだ。

大人の世界とは、要領よくいかに効率的に自分たちの利益をあげるかを、大切にしている世界だと思う。野宿を続けたり、再野宿に戻ってしまう人たちを見ていて、その点が少し足りないようなケースが実に多い。要領が悪く不器用であったり、自分の利益を考えなかったり。でも、もし、大人の世界のなかで、自立をしようとしたとき、ご都合主義の器用さだけが重要だとすれば、ちょっと悲しい。ぼくが労福会に関わるのは、不器用な生き方しかできない人間が、やっぱり好きだからだ。

さて、労福会は…。

はじめての「炊き出し」から、6年がたった。当初、学生だけだったメンバーに加え、たくさんの方の市民、専門分野の人たちの参加も増えてきた。そんななか、「次第に学生中心の会でなくなっているのでは」という懸念の声も、ちらほら聞こえてくる。ぼくは、そうは思わない。6年間居続けた人間の「見た目」からは、むしろ逆に写る。より学生主導の会に一歩ずつ近づいてきているように、である。

会設立当初を思い出してみる。何か決断するにも、困ったことが生じたときも、いつもいつも先生頼みだった。代表、副代表がいなくて何も決められない、そんな偽装「学生の会」だったのである。ところが、今は違う。自分たちができること、やりたいこと、全て自分たちで考え、きっちり行動につなげている。最近も、総会資料作成の話し合いに参加したが、それぞれが、文章に込める1年間の熱い思いをぶつけ、異論、反論が飛び交っていた。それを自分たちでしっかり編集し、1冊にまとめあげている。みごとだ。ぼくの出る幕がないのが、少し寂しい。

いうまでもなく、野宿者への声かけ、付き添いなど、一般市民の人たちの活躍抜きでは、もうこの会は成立しない。専門分野の人たちによる、影からの、思いやりあるバックアップに、どれだけ助けられていることか、はかり知れない。けれども、学生を中心とした執行部の、そういった地道な取り組みの姿勢、誠意が吸引力となっただけで、はじめて、この会がたくさんの方の人たちに支えられて続けているのだと思う。そういう意味で、労福会もようやく、「学生がリーダーとなる会」として自立できたといえるのではないだろうか。

こうしてみると、人を動かしたり、逆に人から支えられるためには、たとえ、不器用であっても、周りに信頼されるような誠実な姿勢、または、相手を気遣う思いやりが欠かせない。自立はひとりではできない。周りに支えられてはじめてできる。そう考えると、自立に必要なのは、大人の論理だけではなさそうだ。遊びたい盛りの学生が、野宿者支援をするなかで、市民や役所、時には野宿者からも、怒られ、中傷される。でも何かそれぞれ参加者のなかに感じるものがあるから、活動を続けている。大人の社会からみれば、滑稽なことなのかもしれない。ただ、大人の社会でも、自分の利益ばかり考え、要領のよさだけが、大切なわけではない。労福会に参加してきて、そう確信を持てるようになった。そんなことを気づかせてくれる労福会のような存在は、こういう時代だからこそ、やはり必要なのだとあらためて思う。

長谷川 喜哉(北海道大学農学部1年)

椎名先生に連れられてはじめて夜回りに参加してから半年と少しがたちました。わずかな期間で、また積極的にこの会の活動に参加していたとは言い難いですが、思ったことを書きたいと思います。

まず、この会の人たちについてのことです。北海道の労働と福祉を考える会という名前のおりこの会の先輩方は、それぞれが自分の意見をもちよく考えながらやっているという印象を受けました。私は今までの20年ちょっとの人生の中で、ひとつのことについてじっくり考えたり、議論をしたりといったことをあまりしてこなかったので、会議のときにまた食事をしながらなど、先輩方が自分の意見を言い合っていることを聞くことはよい刺激になりました。いろいろな考えを持っている人がいてそれを言い合うことができ、さらにそれを深く考えていけるからこそこの会は続いていってるんだ、そしてどんどん進化していってるんだと感じました。

次に、ホームレスと呼ばれている人たちのことについてですが、私はこの会に参加する以前から、駅や公園などでこのような生活をしている人を見かけると、彼らはなぜこのような生活をしているのか、金銭面の問題はどのようにしているのか、どのように食事をとっているのかなどと、好奇心からくるものかもしれませんが多少興味を持っていました。夜回りなどで実際に話をして、それらの疑問についてもいろいろと考えることができましたが、何より本当はこのような生活をしたくないと思っている人が多いということが強く印象に残りました。現在、私は普通に三食ご飯を食べ、あったかい布団で寝られるという生活を当たり前ものと思って生活していますが、路上で生活している方々もやはり同じような生活を望んでいるんだと知ったとき、単なる好奇心ではなくて自分にできることは何かないだろうか考えるようになりました。今になってもそれが何かということは、はっきりとした結論ができてはいませんが、これからもこの会で活動をしていながら自分なりに考えていけたらと思います。

古澤 明(社会福祉法人 特別区人事・厚生事務組合社会福祉事業団)

平成12年4月から平成14年3月まで労福会に参加させていただいた者です。自分が活動に参加してからもう5年以上が経ち、時の流れは早いなあ、と思うとともに、大部分の方は私のことはご存じないとは思いますが、今回、OBにも「私と労福会」というテーマで原稿依頼があったので、的外れかとは思いますが、若干述べさせていただきます。なにせ、札幌から離れると、労福会の情報はホームページと会報とメーリングリストなどから得る限りのものなので、あらかじめご容赦ください。

どうやら北海道でも「ホームレス自立支援等実施計画(仮称)」(案)がホームページ上

で公表されているようですね。その中では基本目標の一つとして「ホームレスを生み出さない地域社会づくりを総合的に推進すること」と記載されています。私事になりますが、現在、東京都と特別区の共同事業で設置されている「路上生活者緊急一時保護センター」で勤務しております。そこでは路上生活を送っていた利用者の方々に、おこがましいことですが、生活歴などを聴取する「アセスメント」ということを行っています。生活歴を聞いていると、北海道に関連のある人は結構多いです（出生地、本籍地その他）。これまで見た限りでは 6 割ぐらいがそうでしょうか。そのため、是非ともホームレスを生み出さないような施策を実施する必要があるのではないかと考えております。ホームレス問題は一つの団体、組織だけでは対応できるものではないと思います。北海道として実施計画策定に動いている中で、民間団体の労福会として、路上生活を送る人たちの自立支援に向けて、何ができるのか、行政機関、関係機関、他の団体等に対して何をすべきという提言をするのか、それぞれの役割分担を踏まえて、協働的な雰囲気の中で考えていく必要がこれからはあるのではないかな、と思います。

活動実態を見ていないのに勝手なことばかりを書きましたが、労福会では、学生主体ということを活かして、自由なことを考えて自由な意見が交わされることが、私がいた頃から続いている良き点だと思います。今後とも、「おじさん」達にとってもそうですが、活動に参加される皆さん自身にとっても有意義な活動となるよう、ますますのご活躍を願っております。

本間 朋子(市民ボランティア)

労福会に市民ボランティアとして、関わり始めましてから 4 年程が過ぎました。

仕事をしながらでも、いつも労福会の活動に加わっている事に喜びを感じています。はじめからのことについては、話が長くなるので、やめますが、ここ 1 年の事についての自分なりの反省と今後についてまとめてみます。

昨年の 5 月に少々入院などした関係で、炊き出しと相談会を数回欠席し、その影響か、夜回りも、つい休みがちとなってしまいました。

やはり、定期的に事務局会議や夜回りに参加していないと、なんとなく自分に覇気がなくなる感じがしました。

早朝回りや夜回りは野宿者の実情が肌で感じられ毎回「どうしたらいいのだろう」と自問するばかりです。それでもメンバーといっしょに回りながら話しかけ、まずは彼らの話を聞くことが大切と考えています。

相談会後の保護課への同伴は今年ではできませんでしたが、自分にできることが同伴以外でもあるかと思っておりますので、今後もやってゆきたいと思っております。

労福会のメンバーがいつも一生懸命活動の方法や、問題点などを考えたり、悩んだり、

率直には話し合うそうした場に居て、いっしょに考えたりするだけですが、そうした事が自分にとって大変大切な時間に思えます。

こんな市民ボランティアですが、これからも宜しくお願いします。

眞鍋 千賀子(市民ボランティア)

労福会は、一人ひとりのおじさんの人生に係わった活動をしていて、これは、実はとても重たい！このことがパノラマのように目の前に見えたら、ハッとすると思います。路上で生活する人、社会の底で生活する人達へ自立するように支援しているのです。私は、おじさんに係わるようになって6年が過ぎ、最近は労福会の一人として役所に同伴してかなり難しい局面になっても、役所と二人三脚でもしているような気持ちになり、行政の窓口の人ともケースワーカーとも肩の力をぬいて話しをするように変化してきています。何とかして、おじさんを助けようと互いに同じ気分になるのです。おじさんは、ここまでの人生の失敗や挫折、孤独、不安で傷ついています。

「何か困っていませんか！」と声掛けをする夜回りの時は、いろんな方にお会いします。「お腹がへっているんです」と目に涙をためてモソモソ言ってきたり、「助けてください。学生さんが回っていると教えてくれた人が居て、待っていた！今朝からパンのみみを食べたきりで膝が痛くて歩けない。これからも食事をどうしたらいいかわからない」「俺は4日間で3時間しか寝ていない」「もう足がパンパンだ。」等など。声掛けを重ねていくと、おじさんは自立心を刺激され頑張ってみようと思ってくれます。彼らは今より良くなりたいから・・・。

でも、居宅生活に移ってから、鬱病になる人も何人かいます。精神科(心療内科ではない)で診断書を書いてもらって、暫くケースワーカーとの接触を止めてもらう人もいます。今、居宅支援の方向にも活動が動いていますが、私が聞いたおじさんの「苦しい叫び」はかなり切迫していて、一人ひとりの人生にかかわる労福会のあり方の大切さを考えないではいられません。それからまた、多くの人々の生保申請の同伴をしたために、今新しい人や若い人や、ひとひねりしたような難しい性格の人が路上に残っていて、以前は生保を受けたくて手を上げていたのに、今はウンでもスンでもなく腰を上げません。彼らは生保を受けたくない理由をよく喋ってくださり、こちらは忍耐して待つ、ということが少し多くなっています。

しかし、私の信仰で説明すると、恵みは、きわめて特別な仕方で弱い人に与えられていて、彼らによって私は気づき、彼らが私にメッセージを送っていますし、身を入れて話しを聞く難しい時も、また彼らの涙で感動させられる時もみな、かけがえの無い活動になっています。

山本 侑(北海道大学薬学部 3 年)

この「私と労福会」のコーナーの主旨は、スタッフが会の活動を通して体験したこと、感じたこと、ボランティアをしている動機等を自由に書く、というものだ。僕にとってこのコーナーを書くことは非常に難しい。去年は書くのを止めたくらいに(笑)。

僕が活動をする際、“社会をよくしたい”“野宿者のために何かしてあげたい”といった動機は基本的には無い(結果的にはそうなっているのかも知れないが、これらは動機ではない)。合う回数を重ねるにつれ、おじさんが心を開いてくれる事を体感できたり、時には酔ったおじさんからまれたりする夜回り。暫く見かけなかったおじさんが、“久しぶり!”と話しかけてくれる炊き出し。何だかよくわからない人たちが、答えの出ない問題について熱く議論している会議。一日中おじさんとアパートを探し回ったりすることもある同伴。居宅に移った方から来る電話での長話…。これらの活動の一つ一つが、僕は本当にただ大好きなのだ。好きで楽しいから会に参加している、それ以上でも以下でもない。これ以外の動機付けを探す必要は僕には無いと思う。例えばサッカーが好きな奴がサッカーをする事と同じだと思う(多分)。何しろ三年間活動してきて、“辛い”“大変だ”と感じたことは殆どなかったのだから。こんな単純な動機じゃあ総会資料に載せられないや…という思いもあって去年は書かなかったのだ。でも結局この動機以外は見つからず、諦めて今この原稿を書いている(笑)。

しかも、三年間僕の周りには何だか魅力的で、変てこなスタッフが沢山いたのだ。“自立とは何か”等良くわからない事について熱弁してくる人や、時に厳しく時に優しくアメとムチと使い分けながら僕達の育成をしてくれた先輩。僕が頼りになると勘違いして色々相談してくる人、神懸りのエネルギーでおじさんのサポートをし続ける市民の方…。これらの一人一人も、僕は本当に大好きだ。これはすごく幸福なことだと思う。好きな人達に囲まれ、好きな活動をしてきた三年間だったのだから。来年からは忙しくなり、あまり会議には顔を出せそうには無いが、会との繋がりだけはずっと持っていたいと思う。

好川 藍子(北星学園大学 4 年)

初めてホームレスらしき人を見かけた時、座りこんでいる姿と足早に歩く人々の姿があまりにも対照的だったことを覚えています。話しかける勇気がなかった私に、労福会はおじさん達と出会うきっかけを作ってくれました。炊き出しのお手伝いをさせてもらい、歩んできた人生や価値観の多様さをおじさん達から教えてもらいました。

また野宿者というと貧困が大きな問題ですが、それだけではなく野宿生活がその人の心に何らかの悪影響を与えるのではと考えるようになりました。ですから炊き出しでは、少し

でも楽しく過ごして頂ければと思って参加させてもらっています。労福会の方々は、おじさん達と視線を合わせ、人と人との関わりを大切に歩んでいる印象を受けました。あまり活動に顔を出せていないのですが、自分も少しでもおじさん達の為になれば嬉しいです。

来年度の役員紹介

顧問	杉村 宏	(法政大学現代福祉学部教授)
代表	椎名 恒	(北海道大学教育学部助教授)
副代表	木下 武徳	(北星学園大学)
	佐々木 宏	(広島大学助教授)
事務局長	世良 迪夫	(北海道大学工学部 3 年)
副事務局長	山本 侑	(北海道大学薬学部 4 年)
事務局幹部	安部 薫道	(北海道大学法学部修士 2 年)
	小野 貴章	(北海道大学経済学部 2 年)
	小島 健	(北海道大学教育学部 3 年)
	椎名 結実	(北海道大学法学部修士 2 年)
	塩崎 満子	(市民ボランティア)
	篠原 睦	(北海道大学教育学部)
	高柳 晴香	(北海道大学教育学部)
	中村 ちひろ	(北海道大学教育学部 4 年)
	中山 治光	(北星学園大学社会福祉学部 4 年)
	成田 允子	(市民ボランティア)
	長谷川 喜哉	(北海道大学農学部 2 年)
	本間 朋子	(市民ボランティア)
	眞鍋 千賀子	(市民ボランティア)